

大学生による緑に関わる継続的なボランティア活動の実施と評価

～大学と公園の連携事業～

神戸女子大学 文学部 教育学科

倉永 綾香

1. 研究の背景と目的

2006年12月、神戸女子大学と隣接する神戸市立須磨離宮公園（以下、離宮公園と記す）は、大学がもつ知財・人材と公園がもつ豊かな自然空間・文化資源をいかし、須磨地域の活性化を図るとともに、市民文化の向上をめざして、全国初となるキャンパス・パーク連携（以下、CP連携と記す）を締結した。

本研究では、大学と離宮公園のCP連携の取り組みをさらに充実させ、魅力ある公園づくりに寄与するため、大学生が離宮公園の特徴であるバラをテーマにした連携事業を実施し、一連の活動を評価することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究の方法は、まず学生が、離宮公園の特徴であるバラをテーマにした継続ボランティア活動を実施した。活動を通じて、学生は公園職員よりバラの管理作業を学ぶとともに、各自が自分の花壇を担当し、主体的に公園の整備に取り組んだ。学生は、活動毎にその日の活動内容や学んだこと、感想などを記録し、ボランティアにおける学びと成果をそのプロセスを含めて蓄積した。

次に、秋のローズフェスティバル開催中の離宮公園バラ園において、来園者を対象に、バラをテーマとした学生たちが考案したワークショップ（以下、WSと記す）を実施した。WS終了後、参加者にWSに関するアンケート調査を実施した。さらに、WS参加者には、学生が作成した離宮公園の王侯貴族のバラに関するリーフレットを配布し、離宮公園の魅力やバラに関する知識を来園者に対し発信した。

1年間のボランティア活動終了後、学生、及び離宮公園職員を対象とし、緑や公園に対する意識の変化を調査するため、最終評価会を実施した。本研究の調査概要は、表1の通り。

表1 調査の概要

	ワークショップ(WS)に関する調査	ボランティア活動 最終評価会
対象	WS参加者	ボランティア活動に参加した学生及び職員
目的	WSの効果を検証するため	参加者の意識の変化を調査するため
実施日	2015年10月25日	2016年1月26日
方法	直接配布、直接回収による質問紙調査	聞き取り調査
回答数	45（配布数48／回収率93.7%）	学生8名、職員4名

3. 結果と考察

3-1. 継続ボランティア活動について

継続ボランティア活動には、本学の1回生8名が参加し、計20回の活動を実施した。活動の内容を表2に、活動の様子を表3に記す。活動では、学生は毎回バラをよく観察し、品種による違いとそれぞれのバラの特徴を学ぶとともに、一連の管理作業の方法を体験的に学んだ。さらに、離宮公園の職員の指導により活動したことにより、公園運営の仕事や公園が抱える課題についても実践的に関わることができた(表4)。

表2 継続ボランティア活動の内容

回数	日付	活動内容	回数	日付	活動内容
1	2015年6月2日(火) または6月8日(月)	ガイダンス	11	10月20日(火)	共用花壇の整備
2	6月16日(火)	花がら摘み	12	10月27日(火)	ローズ・フェスタふりかえり
3	6月23日(火)	除草作業	13	11月10日(火)	担当花壇の整備
4	6月30日(火)	除草作業	14	11月17日(火)	洋らん勉強会
5	7月7日(火)	バラ勉強会	15	11月24日(火)	花がら摘み
6	7月14日(火)	土の追加	16	12月1日(火)	花がら摘み
7	7月21日(火)	除草作業	17	12月8日(火)	花止め
8	7月28日(火)	中間評価会	18	12月15日(火)	バラ勉強会
9	10月6日(火)	担当花壇の整備	19	2016年1月19日(火)	冬季バラ選定
10	10月13日(火)	担当花壇の整備	20	1月26日(火)	最終評価会

表3 継続ボランティア活動の様子

① バラの香りを確認している様子	② バラの花がら摘みをしている様子
	
③ 除草作業の様子	④ 土入れ作業の様子
	

表 4 活動に参加した学生の感想（抜粋）

ガイドスの感想	バラの管理作業実施後の感想
初めて身近でたくさんバラを見たり、触ったりした。バラの作出国には様々な国があり、品種によって特徴が違うことも知った。	花ガラを摘む時は、3枚以上の葉を残して摘むことが大切だとわかった。また、茎が腐らないよう、できるだけ葉の元の方で茎を切らなければいけないことを学びました。
「クイーン・マザー」という品種のバラは、花の形が桜のような印象で、驚いた。	花ガラ摘みは、茎のどの部分でできればよいかかわからず、難しかったが、感覚を掴むと楽しくなった。慣れてくると切る箇所だけでなく、綺麗に見える切り方も教えてもらった。
HT系統のバラは、一般的なバラのイメージで、F系統のバラはアジサイや桜のように見えるものがあった。他の系統のバラについても学んでいきたい。	バラの管理作業を体験し、手間がかけられているからこそ、あのきれいなバラが育っているんだと実感しました。
勉強会の感想	今回は、道具を用いて除草作業に取り組んだが、草の根がとて強いことに驚いた。バラの根と間違えないか怖かった。慣れてくると楽しかった。
「クイーンマザー」は全員一致で好きだった。やっぱり日本人は、桜が好きなのかと思った。	除草作業の目的は、①見た目を良くする、②雑草に養分を与えないようにする、③土に空気を含ませる、ということを知った。これから経験を重ね、除草のプロになりたい。
バラを無断で切ってしまう人がいると聞いて、ショックだった。私たちが手入れをして、そういったことが起こらないくらい素晴らしいバラを咲かせたい。	除草作業をして、バラの木よりも小さな雑草でも、バラの成長を妨げるといふことを知り、驚いた。「キョウチクトウ」という植物についても教わった。
中間評価会	カナブンの幼虫が草の根を食べてしまうことを教わった。
バラに関わって、自然に触れることができ、良かった。除草など普段しないことが体験できた。	咲いている花を切るのは、最初は気がひけましたが、作業後見てみると残っている花が凛としてきれいだった。
この活動に参加して、園芸について母親と会話したり、手伝ったりできるようになった。自然と関わる機会が増えた。	枯れかけのバラを切るのはかわいそうで悩みましたが、作業後にきれいなバラだけになった花壇を見るととてもきれいで嬉しくなりました。
離宮公園の活動に参加できてよかった。これからは、除草作業のスキルを身につけたい。	前回も花止め作業をしたので、量は少ないと思っていたけど、裏や横から見るとまだあり、視野を広くすることが大事だと思いました。
バラの知識をもっと深めて、周りに伝えていきたい。	冬のバラ剪定の目的は、高さを調節し、芽吹き位置をコントロールし、残した枝に養分を集めて春に芽吹き芽を充実させることです。切りすぎるとバラの寿命が短くなることも学びました。
バラガイドを体験した感想	
バラガイドを体験し、今まで目がいかなかったところに気づくことができました。バラは、朝が香りが強いこと、品種によって香りが違うことを教わりました。	
バラガイドは、お客さんによって内容を変えると聞き、すごいと思いました。努力の末、あのすばらしいガイドができるんだと感じました。	

3-2. バラをテーマとしたWS「ローズ・ワード・パズル」の実施とその効果について

2015年10月25日（日）に、神戸女子大学が主催する音楽祭が離宮公園で開催された。同イベントで、継続ボランティア活動に参加している学生が、一般の来園者に向けて、本活動や離宮公園の魅力、バラに関する知識を発信するために、バラをテーマとしたWSを考案した。「ローズ・ワード・パズル」と題したWSでは、参加者が離宮公園の王侯貴族のバラ園を広範囲に散策し、それぞれのバラの特徴や名前の由来等が学習できるよう、バラ園にバラに関するクイズを配置した（計13問）。クイズは、学生たちが継続ボランティア活動を通して得た知識をいかし作成した。実施日当日の会場では、配置されたクイズ毎に風船を目印として設置し、参加者が離宮公園の広いバラ園のどこにクイズが配置されているか、一目で把握できるよう工夫した。参加者には、クロス・ワード・パズルの回答用紙を配布し、自由にWSに参加してもらった。WS終了後、参加者に対し本WSに関するアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果を表5に記す。また、WS参加者には、離宮公園のバラの魅力を発信するため、継続ボランティア活動参加学生が作成したオリジナルのローズ・カタログを配布した（添付資料）。

WS参加者の基本属性は、年齢は10歳代以下が52.4%と最も多く、次いで30代が26.2%と多かった。また、誰と離宮公園を訪れたかたずねたところ、家族という回答が64.4%と最も多かった。さらにWSの感想については、全体の91.1%が「楽しかった」と回答した。WSに関する自由記述の感想には「子どもと一緒にパズルができて、楽しかった。」「家族で楽しむことができた。」という回答がみられた。このことから、WSは、家族と一緒に楽しみながら参加できるプログラムであったことが推測できる。

表 5 WS に関するアンケート調査の結果

1. 年齢	2. 性別
<p>全体 (N=42)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 10代以下 ■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代以上</p>	<p>全体 (N=45)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 男性 ■ 女性</p>
3. 同行者について	4. ローズ・ワード・パズルの感想
<p>全体 (N=45)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 家族 ■ 友人 ■ 夫婦 ■ 恋人 ■ その他</p>	<p>全体 (N=45)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 楽しかった ■ 普通 ■ あまり楽しなかった</p>
5. ローズ・ワード・パズルの効果について	6. お気に入りのバラについて
<p>全体 (N=45)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ できた ■ どちらでもない ■ できなかった</p>	<p>全体 (N=45)</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> <p>■ 見つかった ■ 見つからなかった</p>

WSに参加してバラのことを知ることができたかたずねたところ、全体の93.3%が「できた」と回答していた。自由記述の感想の中には、「たくさんの種類のバラがあり、わかった。」「いろいろなバラを見ることができて楽しかったです。」「バラ園をくまなく回れてよかった。」という回答がみられた。さらに、WSに参加してお気に入りのバラを見つけることができたかたずねたところ、全体の75.6%が「見つかった」と回答しており、限られた時間の中で、参加者がそれぞれにバラを楽しんでいたことがわかった。このことから、学生たちの考案した本WSは、バラ園を広範囲で散策し、楽しみながらバラについて学ぶことができるプログラムだったことがわかった。

3-3. 継続ボランティア活動参加者の緑や公園に対する意識の変化について

本活動に参加したことで、学生の緑に対する関心度等についての意識の変化を明らかにするため、最終評価会を実施した。

一連の活動に参加した感想をたずねたところ、参加学生全員（8名）が「普段の生活では、自然やバラに触れる機会があまりないが、活動を通じてそれらに触れるとともに、バラに関する知識や管理作業について学ぶことができてよかった。」と回答した。また、「一

年間継続的に活動したことで、バラの管理作業を一通り学ぶことができ、技術の習得を実感することができた。今後も引き続きバラについて学んでいきたい。」という回答や「自分がお気に入りを選んだバラには特に愛着がわき、花がら摘みも念入りに行った。」という回答があった。離宮公園職員からは「活動が進むにつれて、学生がバラに対して愛着を持ってくれるようになった。」という回答が得られた。このことから、学生が活動を通じて、バラに関する知識を習得するとともにバラに対する愛着を育み、緑への関心を高めたことがわかった。さらに、3名の学生が「活動について、家族と話す機会があった。」「バラや離宮公園のことをもっと発信していきたい。」と回答し、バラや離宮公園のことについて、周囲に発信している様子が見えた。

活動時、最も大変だったことについてたずねたところ、参加学生全員（8名）が「屋外の作業のため、夏の暑さ、冬の寒さに対応するのが大変だった。」と回答した。離宮公園職員からは、「活動が、学生にとって公園管理の仕事について理解する機会となったことが嬉しい。」という回答があった。このことから、学生は活動を通して公園管理・整備業務という大規模な公園を支える職員たちの仕事に対する誇りや努力、苦労を実感したことがわかった。

最後に、自身の活動で改善すべき点についてたずねたところ、「管理作業の方法だけでなく、バラに関する知識を深める努力をもっとすべきだった。」「職員さんから言われたことをするだけでなく、もっと積極的に活動すればよかった。」という回答があった。このことから、学生が積極的、主体的に活動できるようなプログラムを開発する必要がある一方で、継続的に取り組んだ活動であったからこそ、このような評価を自分たちで出すことができたともいえる。単発的なイベントのようなボランティアでは得ることのできない達成感や楽しさ、人とのつながり、そして困難を乗り越える力などを獲得することができたことは、学生たちの緑や公園に対する意識に影響を与えたと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究は、大学と離宮公園の CP 連携の取り組みをさらに充実させ、魅力ある公園づくりに寄与するため、大学生が離宮公園の特徴であるバラをテーマにした連携事業を実施し、一連の活動を評価することを目的とした。本研究で明らかになったことを、以下に記す。

- ① 継続ボランティア活動は、学生がバラに関する知識やその管理作業方法について学ぶ機会となり、学生のバラに対する愛着心を育むことができた。
- ② 継続ボランティア活動を通して、学生は離宮公園職員と交流を持ち、公園管理の仕事を体験し、その大変さを実感することができた。
- ③ 学生がバラに関する知識をさらに深めるため、主体的に活動するためには、活動内容を再検討する必要があることがわかった。
- ④ 学生が考案したバラを題材とした WS は、家族連れなど多様な世代にバラを親しんでもらう機会となった。
- ⑤ WS のプログラムは、一般市民や子どもに対し、バラについて興味をもってもらった

めに有効であることがわかった。

以上から、継続ボランティア活動を通して、学生はバラに対する知識を深め、自然やバラなどの緑に対する関心を高めていたことがわかった。また、WS を実施したことで、来園者にバラに関する知識や離宮公園の魅力を発信することができた。しかしながら、本活動の効果をさらに向上させるためには、より学生自身が主体的に学ぶ仕組みを取り入れる必要があることがわかった。今後は、本活動のような継続ボランティアとして参加した学生が、次には新たな学生ボランティアへの指導側に立ち、ステップアップしてより発信力を高めるなど、緑の普及・啓発のために、緑に対して関心の高い若年層の初心者から上級者までの幅広いボランティア育成をめざし、本活動のプログラムを再検討していく。